

2021年6月15日開催

会員限定イベント | みんなで作戦会議

—参加者の皆さんから寄せられたコメントを共有します（全8頁）—

Q. あなた（あなたの団体・活動）が、より輝き活躍するための「エコシステム（生態系）の進化」を考えたときにどんな可能性や期待がありますか？

- ・レジリエンス

- ・インクルーシブ・ダイバーシティの実現

- ・ソリューションプロバイダとして「市場を守る」「健全な取引が行われる」というところでは、寄付者の権利とか、プラットフォームの責任ということが今後問われていくと思います。ファンドレイジングや寄付の浸透について、攻めと守りを同時に、周囲の団体さんとも手を取り合いながら進めていくことの重要性を感じています。そういった意味合いでは今後もそこを滑らかにつなぐエコシステムが必要と思っています。

- ・私はデータドリブンによりファンドレイジングをさらに進化させたい！そして、社会の課題解決・価値創造をさらにさらに促進させ、誰もが幸せに生きれる社会を創りたい！

- ・協会に関わる多くの方がWikipedia的に育てることができれば、そこに「成長」と「夢」を見出す人が生まれ、それらがエコシステムのエンジンになると思います。

- ・地方自治体に入ってみて、まだまだファンドレイジングとか遠いなあと感じています。一方、地方自治体は財政が極端に悪化したため、大事なことに手が出せない状況がこれから数年発生しそうです。追い詰められることで逆に遺贈寄付やSIBを自治体がうまく取り入れられる時代が来るのかもしれない。

- ・ファンドレイザーを雇うことの費用対効果がソーシャルセクターにおいて一般知識となること。標準的な期待値が定量的に示され、団体における効果が計算できるようになること。

- ・①NPO業界に若い参加者を増やすためにキャリアや報酬の見える化を図りそこに所属する価値をもっと一般化していく必要があると思います。志のある若い人たちは意識が立派です。それを社会的に報いてあげられる環境を作ることが必要だと思います。②またそれとは逆に高齢者がNPO業界を

認知できる仕組みも合わせて取り組みが必要だと思います。キャリアや報酬ではなく生きがいや意義を歌っていかなければいけないと思います。そうやってNPOにかかわる人口を増やしていくことでNPO業界は輝いていくと思います。

・自分が野生のなかのイキモノであると「目覚める」こと。そして、野生の中で自分の命がどのようなつながりの中にあるのかを「想像」出来るようになること。一人一人が「目覚め」、「想像」出来るようになると、自分の目指すところである、「次の世代を想う」ことが当たり前の世界になるだろうと思います。そんな生態系が実現したら、若い世代が自らの命を絶つようなことはなくなるだろう、と期待が持てます。

・障害や生き方で分けて暮らすのではなく、互いに作用することでより豊かな地になるということが当たり前な人間社会になればいいなと思います。

・認定NPOが輝くこと、もっと社会の中で当たり前前に評価されるようにしたいと思いました。認定NPOを可視化、四季報のようになっていくことは単にさらけ出して比較させるということではなく、勢力になるということだと考えています。一般の方々にとって、関心がなければそれまでかもしれませんが、できるだけ「どこに寄付したらいいかわからないよね」という言葉を減らしたいと思いますし、きちんと税控除についても理解、また制度についても時代とともに発展してほしいと思います。また、一方で、小さな団体にも関わっていて寄付がもらえることが勇気につながることも実感していますし、「共にある」という言葉も出ましたが小さなNPOもエコシステムの中でも大切です。そういったNPOが認定NPOになることを目指すことで組織として成長してほしいと思ひ、その支援ができればと思います。そう考えると認定NPOも種類をつくった方がいいですね。当事者支援が明確な団体、地域を幅広く支援する団体、それらNPOを支援する団体など寄付したい大分類はきちんと検索性・一覧性を持たせると寄付者にとってもわかりやすいと思います。

・地方のコミュニティ（もっと言うと「自治」）の在り方が変わるのではないかと思います。一方で、見方を変えれば地方におけるファンドレイジング・アクション（ファンドレイジングのニーズとシーズ）の見える化やネットワーク（つながり）をどう作るのか、いわゆる旧態的なコミュニティのつながりからの脱却とまではいかないがコミュニティ内だけではなく、コミュニティの内外も含む新しいつながりの重要性を認識し、それをどう形にするかがやっぱり課題だと再認識しましたし、その実現に向けて何をどう進めていけばよいか（いわゆる地域チャプターのようなものをどう作っていくか）、自分はどんな振る舞いをすればよいか悩ましく思いました。

・行政委託事業や助成事業の仕様にある直接事業費だけへの縛りが軽減し、活動する団体が継続していく(ステップアップ)ためのファンドレイズに資金を充当することができ、草の根的な団体がより数

年後大きなインパクトを生み出す近道になる。

- ・SDGsのような大きくてイメージしがたいゴールではなく、ローカルSDGsのような形でそのコミュニティでの共通のゴールを生み出すことができ、セクターや属性を超えて協働できる部分が増えていく。結果的に自分ができることで社会課題に関わる人や、当事者意識を持つ人が増えていく。

- ・自団体にてファンドレイジングに今後注力していくにあたり、外部から伴走支援を受けることになりました。自分一人ではできないことも先にファンドレイザーとして活動されている方の意見や実施方法や工夫など、タイムリーに細かく教えていただけるのはとても心強く感じています。また将来、自分自身も伴走支援ができるように成長したいと、モチベーションアップになっています。まだまだ経験不足ですが、将来別の誰かの役に立てればと思います。

- ・社会課題解決のために資金がより大きな規模で循環していくようになる

- ・エコシステムを日本という国を飛び越え、世界を舞台に作り上げるのはいかがでしょうか？例えば、気候変動の問題は、何とかしないといけないと感じている国際社会、国、企業、団体、市民はありますが、特定のエコシステムの場合、総論賛成、各論条件付賛成でその条件が利害を守ろうとする動きとつながりやすいと考えます。ですので、よりしなやかな強さを持ちうるエコシステムによって実効力を高めたいと考えます。次世代のために。

- ・やりたいことを提案した人がリーダーになって、得意なことを分担して進めていく。得意なことなので仕事も早い。義務でやる仕事から、好きでやる仕事へ。

- ・寄付金の増加

- ・エコシステムというからには、無意識にそのサイクルが回るところが最終ゴールなんだろうなと考えています。そして、事業における主産物と副産物とゴミみたいな考え方もあるかなと思っていて、これまで主産物と直接的なステークホルダーしか見てきませんでしたが、もっと他のことに目を向ければ、現事業の延長上で新しいサイクルを産み出す着想になるかもという期待を持ちました。

- ・エコシステムを通じて、ソーシャルセクターのガバナンス・コンプライアンスの向上を！

- ・「つながりで期待する地域・未来を創る」自分たちが良かれと思う地域・未来は、つながりを通して優しい社会が創れるのではと思います。そういう時の寄付の力は大きいです。

・エコシステムという言葉が聞きなれず、まだ漠然としています。子育て支援の取り組みを地域で行っていますが、私たちの団体の周りにアメーバのようにいろんな取り組みをしている団体が混ざり合っている形が理想だなと思っています。混ざり合い溶け合いながらみんなで進化、広がり、支え合っていく。小さな循環と大きな循環がはじけあっていくそんなイメージを持っています。

・大学のエコシステム・・・大学とNPOを繋ぐ中間組織があると良いのではないのでしょうか。福祉系大学はすでにNPOと繋がっている大学も多いかもしれませんが、NPOには福祉系だけでなく多様な分野のNPOがあるので、特に地方国立大学や私立大学は中間組織があると繋がりやすいのかもしれないと思いました。（学生がボランティアでNPOの活動に参加することはあるでしょうが、「学生ボランティア」だけではなく大学として繋がる事、研究が加わる事で、何かが循環し始めるイメージです。）また、それを大学チャプターが支援することはできるだろうか？または大学チャプターメンバーで、中間組織として一般社団法人を立ち上げるのも一つの方法じゃないかと思いました。大学のファンドレイザーは、とにかく、大学内外の「お繋ぎ役」なので、勝手に中間組織的動きをしていますが、私自身は大学とNPOを繋いだ経験がないので、これに特化した組織があるとエコシステムができるのかと思いました。

あと、大学ファンドレイザー（UFR）の存在価値を高めていきたいと思います。そして、例えば、大学チャプターメンバー内で認定講師の育成をおこなう⇒全国のUFR認定研修、フォローアップ研修を担当する・・・など、大学チャプターメンバーの意識向上にもつながるし、全国のUFRを増やし、レベルアップを図る⇒大学の自己資金調達能力が高まる、雇用の創出にもつながる、・・・社会にとってのエコシステムに繋がると思うのですが、どうでしょう。

・パートナーシップ連携・みんなで担う（互いの専門性を活かす）・役割・持続可能性 自団体はつなぎ役でしょうか？

・進化について、ダーウィンとウォレスが提唱した進化論では、進化とは生存競争の結果として次第に環境に適応した方向に向かって変異していくことを言いますが、これは即ち時間経過とともに環境に最適化されたスタイルに収束していき、次第に多様性を失っていくことを意味しています。ビジネスシーンに当てはめれば、ベストプラクティスの共有等により手法が単一化する、同じような人材の集団となる、といったことが挙げられます。これでは次の環境変化に対応できないため、進化（最適化の促進）と同時に多様性の維持（異質な存在の取り込み）も併せて行うことこそ、持続可能性あるエコシステムになると考えています。

・たいへん大きな課題提示をいただきました。まだまだ消化できていないのが正直なところです。私

自身がエコシステムのどこに位置付き、どのように貢献できるのか、もっと大きく考えるとどのように生きるのか、を模索する機会となりました。自分が成長する可能性が大いにあるということでしょうか。

・エコシステムは、多くの分野で最近よく使われようになりました。これは突然登場したわけではなく、人類とともにずっと存在してきたもので、それを、近代になって人間が自分たちの利益を優先した行動を繰り返し、継続したために、不都合な環境になってしまい自己への偏愛で招いた問題の解決を考えたら、そこにエコシステムがあったことに改めて気づいた、ということだと認識しています。必要なものが全部揃っているエコシステムは、進化も退化もしないと考えます（人間の力で[都合よく]進化させよう、と思ったことが問題の発端です）。循環を構成する各要素の価値は等しいものであり、その循環を止めないことが私たちに課せられた責任だと思います。個人も組織も、その大きな循環を構成する要素として存在するという意識を持つことで、より全体に気を配るようになり、次の行動を決定するための基準が変化してくることが予想されます。このような意識を高める必要性を社会全体で感じたことが、diversity-equity-inclusion, black lives matter, no one left behind などの表現が生まれた背景ではないでしょうか。新しいものではなく、根元的なものを認めて理解することで、生態系の一部としての人間社会は進化しできると思います。

・全国各地でオンラインでの寄付獲得の体制が整っていくこと。寄付獲得の業界としてのデータが溜まっていく仕組みがあること。業界の関係人口を増やしていく手段として若者との接点を増やしていくこと、若者のキャリアの選択肢に入るようなものにしていくこと。

・自団体が取り組む社会課題を解決しただけでは、社会全体としては良くはならない。自団体の社会課題の解決が進み、必要な支援規模が小さくなり、その分、今まで支援くださっていた方が、他の社会課題解決のために支援を継続してくださることも必要だと考えています。

そのために、自団体のことだけを考えずに、社会を俯瞰して見る力を付け、社会課題の解決に積極的に取り組むよう促していきたいと思いました。

・ソーシャルとビジネスのセクターがもっと有機的に繋がり・混じり合い、"何かを提供"するのではなく協働する場が普通になっている世界。スキル、お金がある人がエコシステムの中でそれぞれ自分の役割（水？土壌？大気？）を認識・納得できて満足を感じる世界。自分の役割を認識・納得・発揮することをサポートする横串された共用プラットフォームの構築（コミュニティだけでなく、調査、データ、法律、海外事情などに接することができる豊かなオアシスのような場所）。狭義のNPO向けが強いファンドレイザーのイメージの開放。ビジネスセクターからファンドレイジングに踏み込む際にガツーンと来る合宿型オリエンテーションプログラムを作って、より気持ちよく、より多くの人材が育つ仕組み。

・貴重な資料のシェアを有り難うございます。当方は企業人、公益財団法人への出向者、キャリア・コンサルタント歴10年のパラレルワーカーという立場で、「FRの多様なキャリアの可視化と実態調査」に注目をしました。〈キャリア文脈〉で、FRだけでなく、NPO業界で働く人財のキャリア形成にもっと焦点を当てて社会へPRをしても良いのではないのでしょうか？具体的には、所属組織やポジショニング、扱った分野といった所謂キャリア履歴・キャリアパスだけではなく、モチベーションの高さやスキル・ネットワークの多彩さ、人間性の向上の可能性などの項目も重視する必要があると思います。（個人的には、VUCA時代に必要なスキルを鍛えるには、そしてSDGsの実現に参画し#17の実践をするには、この業界で働くことがとても効果的だと感じております。）自己や自己が所属する組織の存在価値の追求や向上が優先順位の高い目的になり過ぎると本来の受益者目線が失われがちで本末転倒になることを危惧しています。本来、そういうものは良い仕事をしてしっかり成果（勿論アウトプットだけではなくアウトカム）を出せば、自然に後からついてくるものです。しかし、ある程度の存在価値を担保しないと良い人財が入ってこないですし、結果的に業界全体のレベルアップに繋がりません。この、相互循環し、鶏と卵の様な関係にある問題については、産業界のお金だけではない、人財の巻き込みが必要だと感じています。産業界においては雇用の流動化やキャリアの閉そく感、副業意識の高まりなどの追い風もあるので、上手く利用すると良いと思います。

Q. イベントに参加されて今思うこと、感じていることがあれば教えてください。

・エコシステムはそれ自体が大きな生き物なので、エコシステムビルダーであっても、ついエコシステム全体をコントロールしようとするのは限界がある。エコシステムにおける自分の役割は何かを問い続けることで、より自律的で大きな好循環の創出の一助となれるかもしれないというのも最近考えていることです。

・貴重な機会をありがとうございました。「エコシステム」と聞くと縁遠い壮大な印象を持ってしまったりしますが、実はおひとりおひとりの思いと営み、関わりのつながりによって本日の会があったように、一つひとつの取り組みをマクロに捉えなおしたり、分断されてしまいそうなところのつながりの気づきや可視化になったり。そんな切り口・視点でもあるように感じました。

・お疲れさまでした。とてもいい場で、ブレイクアウトルームでも、ダイアログの機会となり、それぞれのご意見から触発される機会となりました。

・普段の仕事から離れて、いろいろな方のお話を聞いて視野が広がりました。

・SIB、遺贈寄付をどうやったら自治体で取り入れられるかについて、議論・実験の方法探っていきたい。

・いろいろ考えるいい機会をいただきありがとうございます。テーマが大きすぎて考えが及びませんでした。NPO業界?を大きく育てていく貴団体の思いに賛同します。とても面白い取り組みだと思いますし必要なことだと思います。今後に期待しています。頑張ってください。

・ファンドレイジングの世界が、生態系を意識して次のステップに進もうとしていることが、素晴らしいと思いました。自分が身を置く対話(Art of Hosting)の世界でも、同様の方向性が感じられ、「分断」ではなく「つながり」を選択していくと、入り口は異なっても行き着く先は同じなのかもしれないと思いました。ファンドレイジングと対話の世界がつながれるようにするのも、自分の役割だと改めて認識した時間でした。ありがとうございます。

・この業界で仕事するのがとにかくチャレンジングで楽しいです。

・現場の活動をしていると、日々目の前の資金繰りに忙殺されてしまうことがあります。今回参加させていただいたことで、社会構造の中で非営利セクターが果たすべき役割を再認識しました。資金提供者とNPOと受益者の関係性の中だけでなく、様々なステークホルダーが関わる意義があり、直接的な受益者へのサービスだけでなく、経営やサービスなど自団体がもつノウハウを共有し合うことで、間接的に全国からグローバルへつながり循環することができると感じました。そのための「つなぎ役」となるファンドレイザーの役割がとても重要であり、より深い学びと実践をしたいと思います。

・考えたことがないテーマだったので少し難しく感じましたが、ファンドレイジングといえど、色々な立場での切り口やつなぎ目があることを知れて良かったです。とても壮大な地図を描いていくというイメージを持ちましたが、エコシステムが出来上がっていく過程がすごく楽しみになりました！微力ながらエコシステムにつながるよう、実践を積み重ねていきたいと思います。

・多くの仲間がいることがとても心強いと感じます。

・より良い未来を作るために、それぞれの関わり方でできることはまだまだありそうだと希望を持ちました。

・素晴らしい会をありがとうございました！皆さんと一緒にエコシステムを作っていきましょう

・オンラインでも、新しい人・考え方に出会うこと。ライブでその場にいることの重要性に改めて気づかせてもらったように思います。

・交流の時間が少し少なかったようですが、多様なセクターの方々の参加が面白かった。今後も期待します。

・科学技術の振興は未来への投資と考えれば、それを国費だけで行うものではなく、日々の株式投資や投資信託のように国民ひとりひとりが参画できるものであっても良いと考えています。

一方で、全ての科学技術を等しく振興することは難しいため、何らかの方法により選択と集中を行う必要があり、現在は関係省庁が所管する審議会による選択、国会で承認された予算の措置による集中、という仕組みがリーズナブルな方法として定着しています。

この選択と集中の仕組みの一助として、寄附という行為を社会的期待の計測ツールや国民ひとりひとりが政策決定に直接参加するためのツールとして捉えることはできないか。科学技術の振興と寄附文化の双方を混合させる一方策として検討していきたいと考えています。

・ファンドレイジングに関わる人たちのお話を伺うたびに、自分では思いつかないこと、気づかないことがたくさんあり、本当に勉強になります。日本ファンドレイジング協会には、社会をよくしたいという共通の目的を持った人たちを惹きつける磁石の役割を、これからも果たしていただきたいと思っています。

・事業を繋ぐ（他部門、他組織）という考えはありましたが、寄付者を繋ぐことはできないのかと考えました。自団体の支援者を他団体に紹介する、という表現になるかと思えます。社会課題解決のためには資金が必要で、且つその大切な支援者を他に紹介するというのは、安定的な資金がなくなるリスクを抱えるかもしれません。しかし、寄付先が分からない人（寄付をしたことがない人）に寄付先を紹介することがあるように、寄付をしたことがある人に、社会課題をより理解してもらうために他団体を紹介することが上手くできれば、信用を担保した新たな資金循環が出来る可能性があるのではないかと。

・ビジネスから足を踏み込んで、「おもい」「共感」といったふわっとした言葉が多用される（と感じた）ことに戸惑いを持っていました。エコシステム構築という一緒に絵を描き、作り上げていく具体的なアクション・プランの片隅にでも参加できたら嬉しいと思いました。